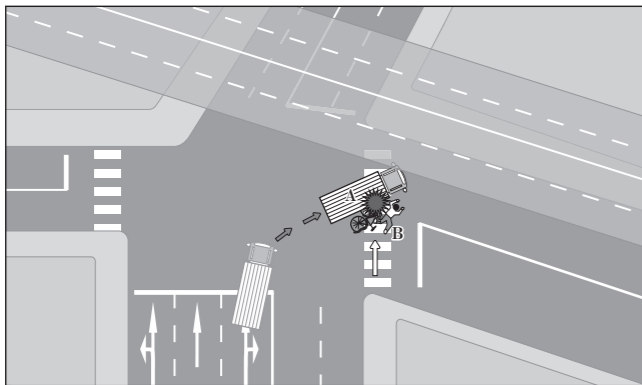


職場における交通安全指導

Part 112

立体の交差点を右折する際、後方から直進の自転車に気がつかず衝突



■事故の概要

<事故の当事者>

当事者A：運転者（中型貨物車）30歳代 男性

当事者B：被害者（自転車乗車中）30歳代 女性

<被害状況>

A：右前部フェンダー曲損、右前輪擦過傷

B：重傷（脳挫傷、全身打撲）

自転車大破

事故状況

横浜市内の運送会社に勤務して3年目のAは、前職もトラックドライバーで、中型トラックの乗務経験が15年の経験豊かなドライバーである。

この日は、倉庫から生活用品を積み込み、東北方面へ配送するため、東名や首都高、東北自動車道の高速道路利用後、主要地方道から国道へ右折するために、立体交差点下の大きな交差点中央で、対向の直進車両の通過を待っていた。当日は平日の午後で交通量は少なかったものの、予定していた

時間よりやや遅れぎみであったため気持ちに焦りが出はじめていた。

信号は赤から青に変わった直後で、直進車をやり過ごした後、右折を開始して間もなく交差点を曲がり終わると思った瞬間、右前で「ガシャッ」という音と同時に「ドコッ」という右前輪で固い物に乗り上げた衝撃があった。

Aは、『やっちゃった』と思いながら急ブレーキをかけて直ちに停止させ、急いで降車すると、右前輪脇にBが頭から血を流し意識が無い状態で倒れていた。また、トラックの下に前輪が折れ曲がった自転車が倒れており、自転車に乗ったBと衝突したことを理解した。

Bは、救急車で救急救命センターに搬送されたが、道路に転倒した際に頭を強打したことによる脳挫傷と全身打撲の重傷となった。

事故の原因

事故当時は曇り空で、片側3車線の主要地方道はスムーズに流れていた。Aは右折車線を走行して来て、信号が青に変わった直後のため、交差点内で停止後、直進車がないことを確認し右折を始めた。

事故現場は、立体交差点下で昼間でも薄暗く、また、時間がやや遅くなったことの焦りから、右折することのみに気を取られて安全確認を怠ったり、Bに気づかずに自車右前角で衝突し、道路に転倒させた事故といえる。

Bは、横断歩道上を信号機の青色に従い自転車

で横断しており、「まさかトラックが右折することはないだろう」と思い込み、トラックの動きを確認しないまま進行し、衝突・転倒して重傷を負った。

安全指導

① 交差点における右折車と直進車の事故

交差点の右折車対自転車、いわゆる右折時の事故は、多くの場合、右折側が「急ぎの心理」から「今、曲がれるだろう」という焦りの判断ミス、または右方の安全確認不足での未発見事故であり、道路交通法の右・左折時の方法にある徐行を遵守し、「注意を一点に集中させず、前方左右の安全確認を徹底する」ということを念頭に置き、自分を客観的に見つめ、安全を冷静に判断できるような習慣づける必要があります。

② 交差点安全進行義務違反

交差点を進行する車両が、信号無視や右左折方法違反、右左折合図車妨害など明らかな交通違反を除き、必ず守らなければならない義務が「交差点安全進行義務」であり、交差点及びその付近で交通事故を起こした場合に、「交差点安全進行義務違反」が課せられます。

交差点及びその付近においては、次の3項目に特に注意する必要があります。

- ① 交差道路を通行する車両等
- ② 反対方向からくる右折車両等
- ③ 交差点またはその直近で道路を横断する歩行者、自転車

かつ、できる限り安全な速度（徐行と義務づけられている）と方法で進行しなければなりません。

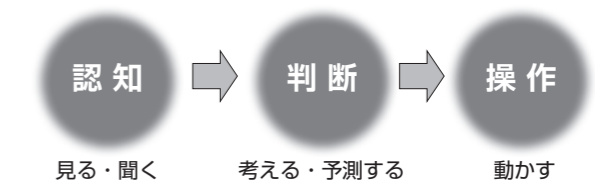
③ 運転行動のサイクル

運転行動は、「認知・判断・操作」で成り立っているといわれます。まず、前方の状況を「認知」します。その状況に対し考えたり予測したりする。

これが「判断」です。この「判断」に基づき「操作」する。この一連の運転行動が的確に行われていれば事故を起こす危険性は低いといえますが、どこかでミスが生じると事故を起こす危険性が大きくなります。

一般的に認知ミスが74%、判断ミス18%、操作ミス8%となり、認知ミス（見落とし）による事故が高い比率を占めています。今回の事故は認知ミスですが、この認知ミスは、即事故に繋がります。

基本中の基本である交差点の安全確認を絶対に疎かにしないことを徹底してください。



④ 細心の注意で安全確認

今回の事故は、交差点右方向の安全確認を怠るという初歩的ミスを犯してしまい、取返しのつかない大事故に繋がってしまいました。

道路や交差点は、時間・場所・気候によって周囲の環境や状況が刻々と変化します。

立体交差する大きな交差点を右折する場合は、確認すべき場所が多く瞬間視できないため、「安全・確実に右折するために、速度を落とし、余裕と細心の注意」をもって、また注意すべきポイントが偏ることがないように広範囲に目を向け安全運転を行ってください。

